琉球大学学術リポジトリ

映像人類学の可能性：比嘉政夫先生の撮った1980年代のタイ・雲南・貴州」補遺

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学法文学部
	公開日: 2015-12-04
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 稲村, 務, ドゥアンケーオ, スットプラータナー, Inamura, Tsutomu, Duangkaew, Sutpratana
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/32769

地理歴史人類学論集　No.5（2014）pp. 117-120
Journal of Geography, History, and Anthropology

「映像人類学の可能性－比嘉政夫先生の撮った1980年代のタイ・雲南・貴州」補遺

稲村　務・スットプラータナー　ドゥアンケーオ

The Supplement to "The Possibility of Visual Anthropology; on the Visual Materials of Thailand and China(Yunnan, Guizhou Province) Taken by Masao Higa in 1980s"

Tsutomu INAMURA and Sutpratana DUANGKAEW

比嘉政夫先生が亡くなって今年で4年になる（2009年4月13日没）。本稿が出版されるころには5年になる。2013年7月6日には糸満市立図書館で「比嘉政夫先生を偲ぶ会」が催され、比嘉先生の資料はすべて糸満市立図書館に寄贈された。ビデオも前回の報告とともに同図書館で見ることができる。

何か比嘉先生に頼まれたような気がして、本誌3号出版からこのビデオを大学院博士課程人文社会科学研究科比較地域文化専攻の授業「アジア文化人類学特講」でディスカッションの材料として拙稿とともに観た。幸いタイのチェンマイ出身で現在チェンマイの日本人コミュニティについての博士論文執筆に取り組んでいるドゥアンケーオさんと中国の延辺大学の特別聴講生3名、上海出身の社会人類学専攻の修士課程の大学院生1名、博士課程大学院生の宮平盛晃君と観てディスカッションをすることができた。4本のビデオのうち「比嘉政夫　タイ国紀行」について特に前回の報告ではわからなかった点、修正すべき点がわかった。ドゥアンケーオさんはチェンマイで日本語ガイドも務めたことのある女性で、日本語が堪能な上、チェンマイの風景や日本人が行く観光地について熟知している。

まず、このビデオは時系列には並んでおらず、一部チェンマイの映像とバンコクの映像が混じっていることがわかった。レストランの映像（37:52～40:43）はミャンマーとの国境の町、メーサイのもので、それからゴールデントライアングル（40:44～46:55）（チェンライ県チェンセン）に映像が変わる。また、バンコク王宮付近の渋滞の映像（1:05:23～1:06:49）の前にあるミニバスから撮った映像（1:03:54～1:05:22）があるが、これはチェンマイの映像であり、最後に映っているのはチェンマイの堀である。これらが時系列に並んでいる保証はなくなった。

そうした編集の痕跡のある割には、比嘉先生の編集の意図は残念ながらみえてこない。特にホテルの部屋の中をこちらがせつなくなるほど無邪気に撮影した映像（1:14:21～1:16:55）などは未編集なら理解できるものの、編集した結果とは思いにくい。映像人類学を専門とする牛島巌先生から日常こそが撮影されない場であるのだと言われたことがあるが、更に時が経つと意味が出てくるのかもしれない。いずれにせよ、この映像が元の8ミリのビデオテープのすべてではないことが想像できる。この「比嘉政夫　タイ国紀行」については対応する文章もほとんどなく、コラージュ的な作品ということができる。

撮影期日については「タイ国紀行（1時間35分）（1987年10月：51歳）」と記したが、前述のようにいくつかのテープを繋ぎあわせており、この前後のいくつかの映像が混じっていると思われる。

写真4　ワットチェンマン　　写真5　砂塔

ワットチェンマンの砂塔をソンクランの時のものと記したが、これは人が寺を出たときに足についた寺の砂や土を持って帰ってしまうので返さなければならないという考え方に起源を持つという。在家信者が寺に集まり、祭りをすることについての寺への感謝を象徴している。この砂塔を飾る紙片はトン（旗）と呼ばれ、この習慣は北部タイとラオスにしか残っていないという。そういう意味ではこの映像が撮られたのは4月でなくともよく、稲村も2013年9月にラオスと西双版納でこれを見た。

写真14はチェンマイ大学ではなく、プーピン宮殿（Bhubing palace）であることがわかった。チェンマイのドイステープ寺院の近くにある王室の避暑地である。

写真14

写真16の女性はカレン族であることがわかった。

写真16布を編む女性

1:00:26からチェンマイの映像になり、ミニバスが走っている場所は　Maharat-nakon Chiangmai　Hospitalであるという。

1:02:15 にある高い建物はチェンマイ大学の Maharat Hospital の中にある Sujinno (スジンノービル)であり、現在もある。赤嶺ノートにある 1987 年 10 月 7 日の琉球大学保健学科のミーティングはここで行われたのかもしれない。サッカー場は現在なくなっている。

1:04:05 にチェンマイの堀の道が挿入されている。今はこの道は一方通行になっている。比嘉先生が撮影されている方向からは現在はみることができない。それからすぐ（1:05:35 から）バンコクの Racha damnoen rd.に切り替わる。1:17:09-1:17:44 はバンコクの映像で、バンコク国立博物館（Bangkok National Museum）が映っている。

1:18:46 比嘉先生が御座船を映している背後に見えるのが、現在プミポン国王が療養しておられるシリラート病院（Siriraj Hospital）である。ここで映像には誰かが「王様がいらした」と叫んで群衆がどよめくシーンがある。今日では水上タクシーの乗り場にはこうした座席は設けられておらず、ゆったりと御座船を眺められるような市民のための座席はない。

写真 26　御座船　比嘉先生の画像

おそらくリアルタイムに観ていたなら学生もそれほどの興味は持つことはなかっただろうし、これから何十年後に見たとしても全くわからないということになって興味は沸かなかったかもしれない。まさに、激しく変化していくアジアで何かが懐かしく感じられるほどの年月が経っているということである。こうしてその国の出身の学生が、自分が生まれていたかいないかという頃の映像を振り返って人類学（あるいは民俗学）的に現在を考え、異文化の相互理解を時間の幅をもって深め合うことこそ比嘉先生自身が映像人類学に託した夢であったように思う。

参照文献訂正

比嘉政夫

1987「海外調査紀行　中国・雲南・貴州紀行―傣族と苗族に龍舟祭の源流をたずねて―」
『せんばる』創刊号　せんばる刊行会　琉球大学　pp.114-121

1988「海外調査紀行　中国・雲南・貴州紀行―傣族と苗族に龍舟祭の源流をたずねて―（二）」
『せんばる』二号　せんばる刊行会　琉球大学　pp.140-145

（謝辞）参照文献の出典を見つけて頂いた井口学さんに感謝したい。